若越郷土研究　六十六巻二号

蓮如上人と見玉尼

阿部法夫

一　はじめに

見玉尼のことを調べるようになったきっかけは、ある人から「見玉尼という方を知っていますか」と質問されたからで、確か、見玉尼が亡くなった後に蓮如上人が御文をしたためていたはずだとのかすかな記憶をたどり、詳しく調べ出したものである。

見玉尼は蓮如上人の第四子で二女。母は蓮如上人の最初の妻　如了尼。見玉尼は幼少の頃から里子に出された。長男　順如だけを除き、如了尼の生んだ子どもたち六人は、他寺に預けられたという。その頃の本願寺は「人せきたへて、参詣の人一人もみえさせたまはす、さひ〳〵と住みておはします」（『本福寺由来記』・『本福寺跡書』）といわれるように貧しく、多くの子を同時には養われなかったようだ。

このように薄幸の見玉尼の死後、世に『蝶の御文』とも呼ばれる帖外御文が書かれている。蓮如上人がご自身の家族の悲しい別れを御文に表したのは、もう一通、三番目の妻であった「家女房」といわれた如勝尼の死を悼むものがある。

さらに、継母如円尼の十三回忌にちなんで書かれたもの（和歌三首を添えて）もあるが、弟応玄＝蓮照個人に宛てたものらしく、『五帖御文』としての説教的機能を持たない、私的な手紙であったようだ。

以上三種が、蓮如上人の肉親の死を悼む御文だと考える。すべて『帖外御文』に収められていて、普段は目にしないものであった。

二　見玉尼の御文

見玉尼は美しく優しい女性であったようだ。『蝶の御文』を読んでいくと、そんな印象を持つ。現代でも「見玉尼って美人だそうですね」と小耳にはさんだりする。まさに美貌の才女といったところであろうか。

現在の吉崎東別院に隣接し、近世・近代を通して広く人口に膾炙（かいしゃ）した「嫁威しの面」を有する願慶寺には、その女性見玉尼の小振りの画像（図1）があるが、そうした面影を表現しているかのようである。丸顔の端正な表情で、父蓮如上人の幼少の姿、布袋丸の面影（図2、いわゆる「鹿子の御影」、それも東超勝寺蔵の画像）を感じ取ることができた。

それでは、蓮如上人が愛する見玉尼の事を切々と語る御文を読んでいきたいと思う。原文のカナ書きをかな書きに改めただけで、表現は原文のままである。

本文を示す前に、二点ほど考慮すべき事を述べておきたい。

図1　見玉尼像（願慶寺蔵）
『鉄人蓮如』世界文化社，1998．より

図2　「鹿子の御影」（東超勝寺蔵）
『蓮如上人絵伝の研究』真宗大谷派宗務所出版部，1994．より

第一点は、蓮如上人自筆の見玉尼の御文が見つかっておらず、帖外御文として収録されているという現状からは、後世、蓮如上人であればこう書いたであろうとした文が蓮如上人の文と誤認されてしまったという可能性があることを考慮に入れる必要はないだろうか。

第二点は、帖外だとされた理由も考えなくてはならないだろう。(1)教義を述べているも検討を要するもの、(2)用語に教義上疑問のあるもの、(3)個人的と思われるもの、(4)単なる歴史的記録であるもの、(5)聖教の抜書にすぎないもの、などが帖外御文として編集される由縁とされた「帖外御文の教義的研究」（神子上恵龍著、『蓮如上人研究』所収　（昭和23年〔一九四八〕・龍谷大学編、浄土真宗本願寺派中宗大師四百五十回遠忌法要事務所刊）の指摘には従わなくてはならないだろう。見玉尼の御文を読み進めると、他にあまり見られない用語「如意宝珠」が使われており、少し異質な印象を受けるのは確かである。

前置きが長くなってしまったが、『見玉尼の御文』を記していこう。『帖外御文』を引用した『蓮如上人御物語条々』からの孫引きとなる。仮に四つに分けて、平がな表記とする。繁雑ながら、読み・漢字等を（　）で加えた。

(A). 静におもんみれは、夫　人の性は名によると申しはんへるも、まことにさそとおもひしられたり。しかれは今度往生せし亡者の名を見玉といへるは、玉をみるとよむなり。されはいかなるたまそといへは、真如法性の妙理如意宝珠をみるといへるこゝろなり。これによりて彼比丘尼見玉房は、もとは禅宗の喝食なりしか、中比は浄花院の門徒となるといへとも、不思議の宿縁にひかれて、近比は当流の信心のこゝろをえたり。そのいはれは、去文明第二十二月五日に伯母にてありし者死去せしをふかくなけきおもふところに、うちつゝき、またあくる同文明第三二月六日にあねにてありし者同臨終す。一方ならぬなけきによりて、その身も病付てやすからぬ体なり。ついにそのなけきのつもりにや、病となりけるか、それよりして違例の気なをりえすして、当年五月十日より病の床にふして、首尾九十四日にあたりて往生す。

(B). されは病中の間にをひてまうすことは、年来浄華院流の安心のかたをふりすてゝ、当流の安心を決定せしむるよしをまうしいたしてよろこふ事かきりなし。ことに臨終より一日はかりさきには、猶々安心決定せしむねをまうし、また看病人の数日のほねおりなんとをねんころにまうし、そのほか平生におもひしこととをこと〳〵くまうしいたして、ついに八月十四日の辰のをはりに頭北面西にふして往生をとけにけり。されは看病人も　また誰やの人までもさりともと　おもひしいろのみえつるに、かきりあるいのちなれは、ちからなく無常の風にさそはれて、かやうにむなしくなりぬれは、いまさらのやうにおもひて、いかなる人までも感涙をもよほさぬはなかりけり。まことにこの亡者は宿善開発の機ともいひつへし。かゝる不思議の弥陀如来の眼力の強縁にあひたてまつりしゆえにや、この北国地にくたりて往生をとけしいはれによりて、数万人のとふらひをえたるは、たゝことゝもおほえはんへらさりしことなり。

(C). それについて、こゝに或人の不思議の夢想を、八月十五日の荼毘の夜あかつきかたに感せしことあり。その夢にいはく、所詮さうそうの庭にをひてむなしきけむりとなりし白骨の中より三本の青蓮華出生す。その花の中より一寸はかりの金仏、ひかりをはなちていてたまふとみる。さていくほともなくして、蝶となりてうせにけりとみるほとに、やかて夢さめおはりぬ。これすなはち見玉といへる名の真如法性の玉をあらはせるすかたなり。蝶となりてうせぬとみゆるそのたましい、蝶となりて法性のそら　極楽世界涅槃のみやこへまひりぬるといへるこゝろなり　と不審もなくしられたり。

(D) これによりて、この当山に喪所をかの亡者往生せしにより
て開けし事⑬も不思議なり。ことに荼毘のまへに雨ふりつれとも、
その時は空はれて月もさやけくして、紫雲たなひき月輪にうつり
て五色なりと人あまねくこれをみる。まことに此亡者にをひては、
往生極楽をとけし一定の瑞相を人にしらしむるかとおほえはんへ
るものなり。しかれはこの比丘尼見玉、このたひの往生をもて
みな〳〵まことに善知識とおもひて、一切の男女にいたるまて、
一念帰命の信心を決定して、仏恩報尽のためには念仏まうしたま
はゝ、かならすしも一仏浄土の来縁となるへきものなり。
あなかしこ〳〵。

『蓮如上人御物語条々』

（『大系真宗史料　文書記録編　7』「蓮如法語」一八一～一八二頁）

ここで、今回引用した書『蓮如上人御物語条々』を少し解説しておこう。本書は『大系真宗史料』の解説・解題によると、寛文十一年（一六七一）円智が蓮如の法語等を収集書写した冊子である。円智とは奥書に「能州輪島　山吹正覚寺　円智」と記すように、能登国（現石川県）出身の僧であった。その内容は、実悟が生涯かけて収集編纂した諸書より円智が随意選択して列挙する形式で記されている。先の奥書を識した後に「五帖之外ノ御文三帖之内抜」として見玉尼の御文等を書写した。さらに本願寺や十四代琢如の消息も収録している。

要するに、日々書き綴られた彼の日常の説教のネタ本であったと思われる。

（『同右書』三二〇～三二一頁参照）

なお、実悟＝兼俊という人は、蓮如上人五番目（すなわち最後）の妻蓮能尼の第三子で、蓮如上人の第二十三子となる。実悟誕生当時蓮如上人は七十八歳であった。蓮如上人の晩年の子、第十男として成長し、たくさんの蓮如伝記・蓮如語録を発表して、父の行実全般にわたる史資料を残した学者肌で、長寿をまっとうした人物である。

さて、円智の冊子に寛文十一年と明記されているので、見玉尼の蝶の御文が原型の形のまま収録された事と合わせて、一つの指標となると考える。いくつかの寺に残る『御文集』以外で、「見玉尼の御文」を収録している客観的な文書として今回執筆にあたり見つけたので、ここに付記しておく。

三　見玉尼の御文の概要

次に、見玉尼の御文の概要に移る。仮に四分割して（A）～（D）、その構成を考えながら再び御文を見ていこう。

まず（A）の段から。ここは、見玉尼の生い立ちから往生までの経緯を簡潔に述べている。

見玉尼は初めは禅宗の寺に里子に出された。少し大きくなって、浄土宗の尼寺（摂受庵）の弟子になった。最近になって、元に戻って「当流の信心のこころ」を得た。里帰りの一つの理由は、世話になった蓮如上人のオバであった見秀尼が亡くなったからだろう。

当時、大谷本願寺はすでに破却され、蓮如上人の家族は転々と各寺を回っていた。文明三年（一四七一）七月頃に吉崎の地に坊舎が建てられ、ひとまず居を構える事ができた。父蓮如の世話をするためだろうか、見玉尼も吉崎へ来ていたようだ。彼女はここで母の妹（蓮如上人二番目の妻、蓮祐尼。見玉尼のオバにあたる）の死を知らされ、悲しむ事しきり。続けて、姉の死に会う事になる。元々病弱だったのか体をこわし病床に伏してしまう。そして、九十四日目に往生していく。

(B)に移る。病床に伏してから、往生する時までの様子が語られる段である。後半に蓮如上人の〝説教〟が始まる。

見玉尼は浄土宗の浄華院流の門徒から真宗の安心決定の心を得た喜びを語り、看病の世話をしてくれた人々に対して常に感謝の言葉を忘れない。そして、心に浮んだ事などを次々に話して喜んでいた。

八月十四日の午前九時半から十時ごろに、定型の如く〝頭北面西〟に伏して往生を遂げた見玉尼の姿に、吉崎御坊に集う人々は感涙にむせんだという。

続いて蓮如上人の〝説教〟が述べられる。最後には感激と感謝のあまり「数万人の弔い」と誇張とも取れる表現をしている。

(C)の段はクライマックスとなる「或る人の不思議の夢想」の語りとなる。荼毘に付され焼け残った白骨から、三本の青蓮華がするすると伸びてきて、その花より一寸（三cm程）ばかりの丸く光った「金ほとけ」が生れ出てきた。それが蝶に変化して消えていった、という語りである。このように、蝶が出現した事が「見玉尼の御文」の眼目となると思われる。

蓮如上人は〝説教〟の続きを語る。見玉は「真如法性の玉」であり、蝶となって飛んでいくのは「法性の空」あるいは「極楽世界・涅槃の都」へと参った証明だと確信し、明言している。

最後の(D)の段は、見玉尼の葬式の時の奇瑞あるいは瑞相を次々に示して、彼女の往生を「善知識と思いて」念仏を申してくれ、彼女を手本として「一仏浄土の来縁」としてくれと、たたみ込むように〝説教〟をしている。

この段の最初「当山に喪所をかの亡者往生せしによりて開けし事」も重要である。見玉尼の死によって、吉崎御坊で公式に営まれ、彼女のためのお墓が造られた事は、真宗の僧俗を挙げて公式に我が娘（その頃亡くなった子どもたちを代表して）を見送った事になるのではないか。

全体を通じて、最愛の娘見玉尼を吉崎の地に呼び戻し、吉崎の地で見送った蓮如上人の二つの思いを見るのである。

一つは、肉親（それも逆縁の子たち）の死を悼み、悲しむ心である。嘆き悲しむべき場面である。もう一つは、宗門の教化者として、身内の死をも〝説教〟の題材としなければならない心である。現在の葬式で読み上げられる「表白」としての機能をも持たせたであろうと考える。

こうした心の葛藤の中で『見玉尼の御文＝蝶の御文』が生み出されたものであろう。

ただ、チラリ、チラリと蓮如上人以外の顔が見え隠れするのが、いささか気になる。偽作かもと思ってしまうのである。

四　見玉尼の御文を考察する

さて、今度は書かれている語句に注目しながら、三たび御文を眺めていこう。本文中、①～⑬の註を付けたが、順次解説を加えていきたい。

①「夫　人の性は名によると」――

「夫」はそれと読む。「其」と書く『高田御文集』（新潟県上越市本誓寺蔵。本誓寺版御文七帖の内二帖目の三に載る）もある。

（『大系真宗史料　文書記録　6』「蓮如御文」一四〇～一四一頁）

「人の性」……性は性格・性質・こころ。

「人の性は名による」……人の性格・性質というのは名前によって変わる。名は体を表わすということ。四字熟語でいうと『名詮自性』となる。

なお、この御文を姓名判断や夢判断に類する御文として、教義解釈の上で注意を要する御文だと分類した先達がいたが、それは先述の神子上恵龍師である。御文の内容を考えずにちょっと速断しすぎのような気がするが、一応の解釈と考えよう。

②「見玉」――「けんぎょく」と読む。見瑞尼という蓮如上人の妹がおり、見玉尼の師が見秀尼であることから付いた名だろう。

これを「みたま」と訓じている書がある。後にも出てくるが、『蓮如上人御画解書』の本文中には「見玉姫」と、あえて訓じている。

（『大系真宗史料　伝記編　6　蓮如絵伝と縁起』一九三頁）

③「真如法性の妙理、如意宝珠」――

なじみの薄い言葉である。適切な訳を捜していたが、浅井成海監修『蓮如の手紙―お文・ご文章現代語訳―』（国書刊行会刊）の一八五頁に見つけた。

「真如法性のいうにいわれぬ深遠なことわりを表わした如意宝珠（人々のあらゆる願望をかなえる不思議な玉）という宝玉」というものである。ちょっと納得しづらい。さらに調べてみた。

「真如」……もののありのままの姿、真実で永遠に不変なものを表わす。

「法性」……宇宙のすべての現象が持っている真実不変の本性を指し、真如法性・真性ともいい、真如＝法性と考える。

親鸞聖人は『教行信証』の行巻に「蓮華蔵世界に至ることを得れば即ち真如法性の身を証ぜしむ」（正信偈の一部）と述べておられるので、真如法性という言葉は真宗においても使用していると考えてよいだろう。

「妙理」……表妙の理、不思議な道理。

「如意宝珠」……神秘的な宝玉の名であると次のように解説される。欲するがままに種々の宝物を生み出すといわれ、一説には龍王の脳の中にあるという。多くの財宝が得られるだけでなく、毒にも犯されず、火にも焼かれないともいう。如意輪観音と地蔵菩薩が所持している模様（電子辞書ＥＸ－ｗｏｒｄより）。

なお、御文には「如意宝珠」自体の説明がないが、蓮如上人はあえて省略したものだろう。

④「禅宗の喝食」――見玉尼は、幼少の頃には禅宗の寺へ〝里子〟に出され、修行に出されたようだが、どの寺へ出されたか記録には載らない。

「喝」……禅宗の用語で、叱咤したり、言葉では言い表せない境地を示す時に出る一種の叫び声であるという。

「喝食」……大衆誦経の後、大衆に食事を大声で知らせる役の僧であった。後には有髪の侍童が務めるようになり、稚児と称したと辞書には解説される。男児が主に務めたものだが、見玉尼のように女児が担当した事もあったようだ。

なお、見玉尼の兄弟姉妹たちも、男子は南禅寺、華開院などへ、女子は摂受庵へと「喝食」「弟子」に出されている。

本願寺の貧困から、やむなく家から出されたと実悟の著した諸書から言われているが、一方、その当時の貴族社会においては、慣習として他家へ養子に出したりして〝武者修行に出す〟という風潮があったという視点も見逃してはならないと考える。

⑤「浄花院の門徒」――浄花院とは、京都にある浄土宗鎮西派浄華院流の寺で、浄土宗四ヶ本山の一つ。正式には清浄華院という。蓮如上人のオバ（祖父巧如の娘・存如の姉）見秀尼は、その流派の尼寺（京都吉田の摂受庵）の住持におさまっていたが、見玉尼は姉妹とともに摂受庵の弟子となっている。宗派に関係なく、親戚が住んでいる寺へと預けられたものだろう。

⑥「去文明第二十二月五日」――

「去んぬる文明第二年（一四七〇）十二月五日」と分ける。

⑦「伯母にてありし者死去せし」――

このオバが蓮如上人にとってか、見玉尼にとってかが非常に迷う所で、御文を解説した著者によって違うのである。

西山邦彦著『蓮如上人帖外御文ひもとき』（一九九六年、改訂版法蔵館・刊）や浅井成海監修『蓮如の手紙―お文・ご文章現代語訳―』（一九九七年、国書刊行会・刊）では、蓮如上人のオバ見秀尼の死を示していた。一方、籠谷眞智子著『蓮如さまとお方さま』（一九九八年、弘文出版・刊）では、蓮祐尼（蓮如上人の二番目の妻、最初の妻の妹にあたる）の死を表わしていた。その差異をよく調べてみると、偶然にも二人の女性は同じ日に亡くなっていたのであった。

⑧「あくる同文明第三二月六日」――

「あくる同じき文明第三年（一四七一）二月六日」と分ける。

⑨「あねにてありし者臨終す」――

見玉尼の姉である如慶尼（蓮祐尼の姉である蓮如上人最初の妻如了尼の二番目の子で、蓮如上人の長女である）が二十六歳の若さで亡くなっている。

なお、この御文には二人（実は三人）の死去を記すが、実際には他にも亡くなった人がいたのである。

○文明三年二月一日には妹（五女、蓮如上人十番目の子）妙意尼死去す。十二歳。

○文明四年八月一日には同じく妹（八女、蓮如上人十四番目の子）了忍尼死す。七歳。

すなわち、蓮如上人は見玉尼を見送る前に三人の娘を亡くしている。さらに、蓮如上人二番目の妻も、蓮如上人のオバも死亡していた。同時期に五人もの死を見守った訳である。このような悲しみ深い中、最愛の娘見玉尼を代表として、娘たちの死を悼む御文を書き上げたものと思われる。

しかし、蓮如上人であれば、亡くなったすべての娘たちの記事を含めて御文を書いたのではないだろうか。そんな疑問が残る。

⑩「また誰やの人」―だれそれの人々、すなわち、まわりにいる人々のすべてと考える。「だれの人」を強調した言い方。

あるいは、〝他屋に集まる人々〟という意なのかも知れない。

⑪「数万人のとぶらひをえたる」――

見玉尼のお葬式に数万人も集まる。この数万人という語はちょっと大袈裟であろう。

吉崎御坊が完成するのが文明三年七月頃。この頃見玉尼が父蓮如上人の世話をするためにか、吉崎の地へ来ていた。浄華院流の人々も少なからず連れて来ていたであろう。また、他屋の主人・女房たちも徐々に増えたであろう。諸国から集まる門弟たちも増えたであろう。たくさんの僧俗が群衆した様子を「数万人」と示したものだろう。見玉尼が皆に慕われていた事を如実に示してはいないだろうか。

⑫「或人の不思議の夢想」――

『蝶の御文』と別名で呼ばれるように、

(1)、荼毘にふされた白骨の中より、

(2)三本の青蓮華が出生し、

(3)その花の中から一寸ばかりの「金の仏」が光り輝いて伸びてきて、

(4)しばらくして蝶に変化（へんげ）して消えてしまった

という瑞夢を見た「或る人」がいたという不思議な不思議なエピソードである。

蝶の存在に注目して、後世江戸時代の蓮如伝記・蓮如絵伝の詞書（ことばがき）を眺めてみると、概して蝶のくだりがなくなってしまうという現象を見るのである。なぜ消え去ってしまうのだろうか。

まず「或る人」から見ていこう。前出の西山邦彦氏も浅井成海氏も、また、原田満子著『蓮如―乱世を生きる智恵―』（一九九七年・木耳社刊）、野々村智剣著『蓮如上人紀行』（平成十七年〔二〇〇五〕・探究社刊）においてもすべて「或る人」を蓮如上人自身と断定している。「蓮如上人の白昼夢」と言い切る著者もある程である。

御文の筆法としてご自身の想いを別の誰かに語らせているという手法をよく見るので、筆者も、蓮如上人ご自身の夢ではないかと考えていたものであった。

しかし、蓮如上人のまわりの人ではなかったかと思わせる文がたくさん出てきた。

まず、蓮如上人に近しい関係にある人という事で、門弟が現れる。前出の『蓮如上人御画解書』という絵伝の絵解き本には、

「翌十五日朝参の内にて出羽の同行申しけるは、昨夜不思議の夢を見し也」「白蓮華が三本はへ、其内より金色の小仏光明あり〳〵と拝ミ奉る」

（『大系真宗史料　伝記編　6』「蓮如絵伝と縁起」一九四頁）

と少し変えられて載る。「出羽の同行」と「白蓮華」に変化。

また、蓮如上人に近従する人として多屋の人々を想定した『信証院殿図指』という絵解き的な解説書には、

「翌十五日荼毘し玉ふ。其夜多屋の人々同夢を感じける。御火葬中かより金蓮華三茎生し、華の内より一寸ばかりの金色の仏影れ出で西の空らに隠れ玉ふと、翌十六日の朝各々物語するに」

（『同右書』二三六頁）

と少しイメージが変わる。「多屋の人々」と「金蓮華」に変化。

「多屋の人々同夢を感じける」という表現は、〝往生の印〟の一つとして、ある人が往生したという事実をたくさんの人々に知らせて、多くの人が同時に往生人の夢を感得するという事につながり、全く、『往生伝』の世界そのものである。ちょっと意外ではあるが、近世の時代ではそれがあたり前の事であったのだろうか。

また、三河国西端の地にあった栄願寺の『蓮如上人西端伝記』という蓮如絵伝の絵解き台本には、

「ある人が蓮如様へ出られて申上る様には、夜前は不思儀（議）なる夢を見ました。見玉尼公様の御往生遊ばされて御火葬の時、火の中より蓮華に三体の仏けが乗て、虚空へ御上り遊ばされました。夫れは見玉尼公の宜敷御往生の随（瑞）相なり」

（『同右書』一四五頁）

と、変化がはなはだしい。ここでは蓮華の上に三体の仏さまが乗っかって舞い上がっていったというように、話が全然違ってきている。吉崎からの伝聞が曲解されてしまったからか、蝶が消えたものと考えられる。（図3参照）

『蓮如上人絵伝』は、宗祖親鸞聖人絵伝とは性格を異にする。『親

図3　蝶が消える『蓮如上人絵伝』
『蓮如上人絵伝の研究』真宗大谷派宗務所出版部，1994．より

鸞聖人絵伝』は各場面の絵相が決められており、御本山からしか下付されない。同様の御絵伝が全国一律に発行されてくる訳である。

それに対し、『蓮如上人絵伝』については所蔵する各寺院の由緒にからんだものを主軸に、その地域における蓮如上人の歴史上のエポックを並べたものも多い。それこそ自由に我が寺と蓮如上人との関わりを描いているのである。

一、二を除けば、『蓮如上人絵伝』は本山からは発行されず、地方画家が自由に書いたものがほとんどである訳である。

さて、先にも触れた通り、通常の往生伝では語られてこなかった材料を『蝶の御文』には使用された。しかし、近世の蓮如伝記、蓮如絵伝の絵解き本では、蝶の存在を消し去ってしまった。蓮如上人が、他の逆縁の娘たちの死を省いて見玉尼に収斂（しゅうれん）させて心を込めて死の縁を述べた『見玉尼の御文＝蝶の御文』を、ある意味、無効にしてしまったのかも知れない。

いわゆる往生伝の世界では、蝶の存在は必要なかったからか、無視されてしまったものであろう。

⑬「この当山に喪所をかの亡者往生せしによりて開けし」――

先の註⑪の所と重なるかとも思うが、この吉崎御坊において初めて大規模な葬式を行ない、さらにお墓も設けられたという事は、蓮如上人にとっても本願寺にとっても大変な事件であった訳である。

墓を造ったという事は、その後墓参りもしたであろうと考える。

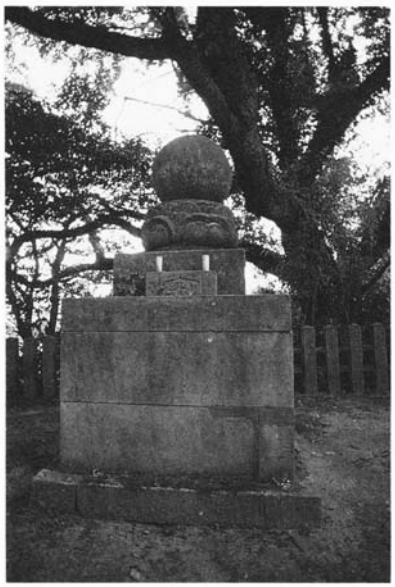

図４　吉崎山上の見玉尼公墓『鉄人蓮如』世界文化社，1998. より

見玉尼忌という法事もしたであろう。そんな葬式後の行事も描き出す部分である。

なお、「見玉尼公墓」はもと、三間四方の饅頭型の土墳であったのを、昭和三（一九二八）年に石窟を新築して、傍らに一碑を建てて「蓮如上人御息女見玉尼公墓」と刻んだと『若越墓碑めぐり』（石橋重吉著　昭和五年〔一九三〇〕頃刊・昭和五十一年〔一九七六〕歴史図書社復刊に記載がある（図４）。

五　「文明五八月廿二日書之」の意味

見玉尼の御文の写本の中に、章題のような年紀が書かれているものがある。この御文が「文明五年八月二十二日」に書かれたという事を表わすものである。

見玉尼の死去の時期は文明四（一四七二）年というのが定説となっている。実悟師の記録によるという。『蝶の御文』を載せる御文集には、概して年紀は記されていないが、一部の御文に「文明五年」と記されるのは、何か理由があるのだろうか。蓮如上人の『御文集』を編集した者が思い違いをして文明五（一四七三）年と誤記したものだろうと、一応は考えられる。しかし文明五年に御文が書かれたことを否定できないと考える学者もいるのである。

それを信ずれば、蓮如上人は見玉尼一周忌にこれを書いた事になる。客観的に書ける時期になって書いたと判断しておこう。他人が夢みた内容を、さもありなんと認証して、御文の中に表現したものだと考えておこう。

六　おわりに

見玉尼の御文は蓮如上人の御文の中でも特異なものであった。成り立ちを考えるに、行方不明となった生母の住んでいる所と思われる西国の方へ弟子を尋ねさせたり、別離の記念の「鹿子の御影」の絵師に再び何枚も描かせたりして、〝生母の温もり〟を求めたと考えられる。その熱き想いは妻にも成人した娘にも向けられて、彼女たちに幼き頃から得られなかった母の面影を求めたのかも知れない。そして、わずかな同居の間に見せた見玉尼の親孝行の中に〝母性〟を見ている蓮如上人の想いを見るのである。

見玉尼の前に亡くなった妻や娘たちの代表として見玉尼をあえて前面に出したのが『蝶の御文』になって結実したものと考えたい。

先に詳しく述べた如く、近世においては「こがねほとけ」として浄土へと向かった事になって、蝶という蓮如上人創出の存在を完全に消してしまった時期があった。

ただ、本文として紹介した円智書写の御文には、蝶が存在した。

もう一つ、近世の大真宗学者であった先啓了雅の『蓮如上人縁起』にも蝶の事には触れている。御文を中心として引用するなど実録主義で通した蓮如伝記の代表である。この二書以外は見玉尼の記事も扱っていないのがほとんどであった。

市井の説教の場では、蝶の話題はやはり不要であったのだろうか。真宗の僧の語る奇瑞は〝こがねほとけ〟だけでも充分だったのだろうと一方では納得してしまうが、やはり、後世の人たちは蓮如上人の意向と違った方向に歩んでしまったと思わざるを得ない。

見玉尼の御文に限らず、『五帖御文』にしても『帖外御文』に対しても真摯（しんし）に読み込む必要性を感じた所である。